

修士論文(要旨)

2011年7月

「断り」の男女差についての日中対照研究
—申し出に対する「断り」表現を通して—

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
209J3905
王 麗娜

目次

序章	1
1 研究の背景	1
2 研究の目的	1
3 研究の方法	2
第1章 先行研究	3
1.1 断り表現について	3
1.2 「申し出」と他の類義用語の定義比較	4
1.3 意味公式について	5
1.4 談話完成テスト(Discourse Completion Test)について	5
第2章 調査	6
2.1 予備調査	6
2.2 本調査	6
第3章 分析と考察	10
3.1 断り表現のパターンの出現頻度	10
3.1.1 相手が親しい男性の場合	11
3.1.2 相手が親しい女性の場合	12
3.1.3 相手が親しくない男性の場合	13
3.1.4 相手が親しくない女性の場合	14
3.1.5 相手が無関係の場合	15
3.2 意味公式の出現頻度数とその割合	16
3.3 意味公式の内容分析	21
3.3.1 意味公式「結論」の内容	21
3.3.2 意味公式「将来約束」の具体例と機能	28
3.3.3 意味公式「心情表明」の具体例と機能	30
3.3.4 意味公式「言い淀み」の具体例と機能	33
3.3.5 意味公式「回避」の具体例と機能	39
3.3.6 意味公式「冗談」の具体例と機能	40
3.3.7 意味公式「呼称」の具体例と機能	41
第4章 まとめと総合的考察	44
第5章 結論と今後の課題	49
主な参考文献	
資料	

要旨

序章

人間は、多くの対人コミュニケーションにおいて、相手が親しいか親しくないか、男性か女性かなど、相手の属性を十分に考慮し、対人関係の判断を行ってから、それに従って自分なりの言語表現を選択する。「断り」は一種のリスクの高い発話行為として、話し手の言語運用能力を試すと同時に、異なる文化圏に生きている人々の発話の特徴や言語運用のストラテジーや性格や心理的な特徴などをあぶり出すと思われる。本研究は異文化摩擦や異性間のコミュニケーション上の問題を解明し、さらに、異文化と異性間のコミュニケーションにおける方略を探るため、日本語母語話者(JJ)と中国語母語話者(CC)の20代学生の申し出に対する「断り」の男女差について調査し、考察を行った。

第1章 先行研究

断り表現についての先行研究はこれまで数多く存在している。例を挙げると、蒙(2008)、馬場・禹(1994)、吉井(2009)、加納・梅(2002)などは依頼に対する「断り」表現を取り上げて、それぞれの視点から分析した。そして、誘いに対する「断り」表現についての分析は藤原(2009)がある。このように、多くの先行研究は「依頼」「誘い」などの発話行為をめぐる「断り」表現を考察したが、「申し出」という発話行為についての研究は少ない。一方、先行研究には、社会的地位と親疎関係をともに考えたものは多いが、聞き手の男女差が話し手の言語行動に影響を与えるかなど、男女差の視点から分析したものはあまり多くない。

そして、本研究では、発話行為を分析する際の単位として、意味公式を用いる。「意味公式」とは、藤森(1995)によると、発話を社会の相互作用の中で見た場合の発話行為具現化のための最小機能単位だということ。意味公式に関する分類は様々あるが、代表的なのは Beebeら(1990)による「直接的な意味公式」「間接的な意味公式」という分類法である。調査方法は談話完成テストを採用した。談話完成テストについて、Kasper(2000)は、コミュニケーション行為が実行される際のストラテジーのタイプを調べる際、談話完成テストが効果的であると述べている。

第2章 調査

今回の調査は、日本語母語話者の男性(JM)と女性(JF)、中国語母語話者の男性(JM)と女性(JF)という四つのグループで、それぞれ10名の20代の学生を調査の対象とし、アンケートに答えてもらった。アンケート用紙は、場面設定と申し出の台詞が書かれ、全部で9つの場面から構成されていた。場面は、同輩の男性または女性に申し出られた場合、親しい場合と親しくない場合に、それぞれどのように断るか、そして、無関係の人に申し出られた場合、どのように断るかのよう設定した。分析は質問用紙の回答の発話内容から意味公式の部分抜き出して行った。

第3章 分析と考察

まず、断り表現のパターンの出現頻度について考察した。まとめたパターンはそれぞれ「結論先行型」、「理由先行型」、「詫び先行型」、「感謝先行型」である。「先行型」とは、発話行為の最初に現れた意味公式を指す。そして、意味公式の出現頻度数とその割合を示しながら、JJとCCの意味公式の使用状況および四つのグループのそれぞれの「断り」の特徴を分析した。例えば、相手の申し出に対する断りという発話行為を行う際に、CCはJJに比べ「詫び」という意味公式をあまり使っていない。JJによって使用される「代案」の回数はCCの半数にも至っていないなどの結果があった。「断り」の特徴について、JMは相手の申し出を断るときに、言語表現はほかのグループに比べて、少し単調であった。JFは最も多様な意味公式を使っている。JFとCMはそれぞれ自分なりの意味公式を持っているなどの特徴が見られた。

また、特徴的な意味公式やコミュニケーションに影響を与えると思われる意味公式を取り上げ、内容から分析を行った。

第4章 まとめと総合的考察

第4章では第3章の分析結果をまとめながら総合的な考察を行った。まず、「断り」パターンの分析に見られた四つのグループの特徴をまとめた。例えば、女性(JFとCF)は男性(JMとCM)より間接的な断りパターンを選びやすい。JJは親しい男性より親しい女性に相当の気配りを払う傾向があるのに対して、CCは親しい男性より親しい女性に対し気軽に断る傾向がある。JMとCMは親の男性より疎の男性に対して、はっきり自分の意向を伝える必要があるという考え方を持っているようである。全体的に見ると、女性は男性より発話量が多いという結果があった。そして、意味公式の内容を分析した結果として、「将来約束」「心情表明」「言い淀み」「回避」「冗談」など多くの意味公式の使用状況において、男女差と日中の差が見られた。例えば、「冗談」について、「男性は普通でわかりやすいユーモアに対する熱意があまり強くないのに対して、女性は簡単なユーモアであっても、他人を笑わせれば意義があると思っている」という分析があった。このように、意味公式ごとに見られた男女差と日中の差を考察した。

第5章 結論と今後の課題

本研究では、相手との親疎関係や相手の性別が調査協力者の「断り」表現に多少なりとも影響を与えたことが明らかになった。そして、相手によって、日本人の男性と女性、中国人の男性と女性が用いた「断り」パターンには差があることが明らかになった。相手の申し出に対して、それぞれの調査協力者グループは様々な方略を考え、自分の言語表現に工夫をしていたことが分かった。

また、意味公式についての分析を通して、男性と女性、日本人と中国人のステレオタイプに検証された部分がある一方、変化が起きている部分も発見された。

今後は、分析対象を文字言語から自然会話へと変更したり、協力者の人数を増やしたり、会話タスクにおける発話者のカテゴリーなどを多様にしたりすることにより、今回の結果を検証したい。

主な参考文献

- 荒巻朋子(1999)「アメリカ人と日本人の断り表現の比較」『長崎大学留学生センター紀要』第7号 pp.105-137
- 伊藤恵美子(2002)「マレー母語話者の中間言語に見られる語用論的特徴—断り表現における普遍性と特殊性—」『ことばと科学』vol.15 pp.179-197 名古屋大学言語文化研究
- 伊藤恵美子(2006)「日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか—長さと適切性からの分析—」『異文化コミュニケーション研究』第18号 pp.145-160
- 加納陸人・梅曉蓮(2002)「日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察」『言語と文化』第15号 pp.19-41 文教大学
- 蔡胤柱(2005)「日本人母語話者のEメールにおける『断り』—待遇コミュニケーションの観点から—」『早稲田大学日本語教育研究』第7号 pp.95-108
- 肖志・陳月吾(2008)「依頼に対する断り表現についての中日対照研究」『福井工業大学研究紀要』第38号 pp.133-140
- 馬場俊臣・禹永愛(1994)「日中両語の断り表現をめぐって」『北海道教育大学紀要(第1部A)』第45巻 第1号 北海道教育大学
- 藤原智栄美(2004)「日本人とインドネシア人の『断り』行動比較—談話完成テストにおける言語データに関する分析より」『言語文化学』13号 pp.21-33 大阪大学言語文化学会
- 藤原智栄美(2009)「インドネシア人・台湾人日本語学習者による『断り』のストラテジー—プラグマティック・トランスファーの再考—」『茨城大学留学生センター紀要』第7号 pp.15-28
- 藤森弘子(1995)「日本語学習者にみられる『弁明』意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』87号 pp.79-90
- 蒙韞(2008)「中国人日本語上級学習者の語用論的転移の一考察」『国際開発研究フォーラム』36号 名古屋大学 pp.241-254
- 吉井千明(2009)「断り表現—親しさの度合いに着目して—」『東京女子大学言語文化研究』18号 pp.70-86
- Beebe, L. M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarecella, E. Andersen & S. C. Krashen (Eds.), *Developing of communicative competence in a second language*, (pp.55-73). New York: Newbury House.
- Kasper, G. (2000). Data collection in pragmatics research. In H. Spencer-Oatey (Ed), *Culturally speaking*, (pp.316-341). London: Continuum